

令和4年度の病性鑑定実施状況

令和4年度に当所で実施した病性鑑定件数は、643件でした。畜種別内訳では、牛が451件と最も多く、ついでイノシシが130件（全て豚熱・アフリカ豚熱の全国的サーベイランス検査）、3番目に家きんが47件でした（表1）。

表1. 令和4年度 病性鑑定状況 (件数)

畜種	解剖	検査	合計
牛	89	362	451
家きん	5	42	47
山羊・羊	7	5	12
イノシシ	0	130	130
ミツバチ	3	0	3
合計	104	539	643

最も多い牛の検査実績について、疾病別にみると牛伝染性リンパ腫と牛ウイルス性下痢の検査が約9割を占めており、これらの疾病の侵入・まん延防止の取り組みが進んでいることが窺われます（表2）。

表2. 令和4年度牛の検査実績（頭数）

疾病名	用途		合計
	肉用牛	乳用牛	
牛伝染性リンパ腫	2,350	1,422	3,772
牛ウイルス性下痢	1,758	1,093	2,851
ヨーネ病	86	133	219
異常産調査	104	98	202
下痢・血便等診断	23	9	32
乳房炎細菌検査	0	113	113
その他	10	10	20
合計	4,331	2,878	7,209

牛の解剖を伴う病性鑑定の結果について、その内訳をみると、消化器系が41%（38件）と最も多く、その中でも牛クロストリジウム・パーフリンゲンス感染症が11件、鼓脹症が14件と多くを占めており、ここ数年同じ様な傾向が続いています。全てが肥育牛での死亡例で、ワクチン接種の検討や観察強化等の飼養管理の徹底が望まれます。（三溝）

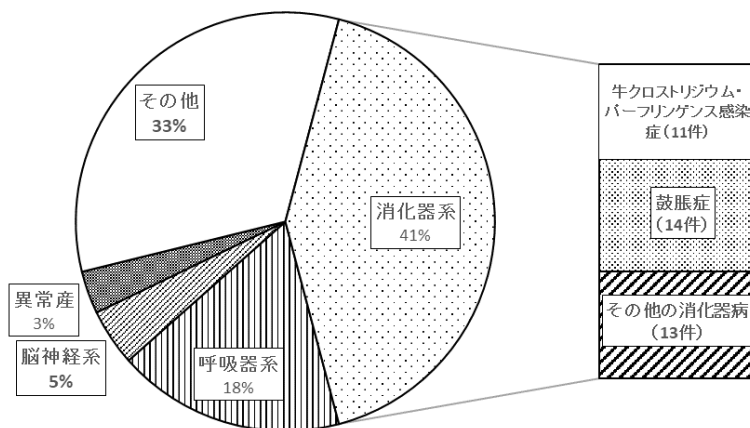


図1. 令和4年度 牛の解剖を伴う病性鑑定